



平野悠

1976年の新宿ロフト

1976年10月、新宿ロフトオープン

いま蘇る、

オープンセレモニー

伝説の10日間

平野悠 × 牧村憲一

(音楽プロデューサー)

対談及び  
貴重資料収録

の舞台裏

日本のロック・ミュージックが真の意味で市民権を勝ち取る前哨戦を、ライブハウス「ロフト」の創設者が回顧する壮大なクロニクル



1976年の新宿ロフト

平野悠

星海社

283



SEIKAISHA  
SHINSHO





SHINJUKU

LOFT

LIVE HOUSE

SHINJUKU

LOFT

この夜は175日の2週連続  
全体的に7万93名  
開催は、毎日16:30~23:30まで  
30分前には販売券をお求めください  
ホールにて販売してはいます  
（お申し込みは、お電話にて）  
（お申し込みは、お電話にて）  
（お申し込みは、お電話にて）

正少道 貴客の口には  
一切たまりません  
いまだかつてない  
現場入場をお勧め  
させていただきます



## プロローグ

2021年3月、ライブハウス「ロフト」グループは創立50周年を迎えた。半世紀という道程の中で様々な困難な局面はあったものの、ロフトは潰れずに生き長らえてきた。私たちは70年代初頭の日本で巻き起こったフォーク／ロックという新たな音楽ジャンル、新興のムーブメントを支持する立場を貫いてきた。その誕生の歴史は、かつてはセゾングループの一員であり、現在はセブン&アイ・ホールディングス傘下の「ロフト」より長い。

1986年6月に東京厚生年金会館で行なった新宿ロフト10周年記念イベント、1997年7月に日本武道館で行なった新宿ロフト20周年記念イベント。あるいは、1991年に新宿ロフト、クラブチッタ川崎、渋谷公会堂（現・LINE CUBE SHIBUYA）、日比谷

野外音楽堂の4カ所で行なったロフト創立20周年記念サーキット・イベントなど、ロフトではこれまで折に触れて数々のビッグ・イベントを仕掛けてきた。創立50周年という大きな節目には、スタッフ連中が張り切って西武ドーム（現・ベルーナドーム）でも借りて一大イベントを打とうなんていう話もあったのだが、ご承知の通り、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により頓挫してしまった。ビッグ・イベントを仕掛ける以前に、新宿ロフトを始めとするロフトの10店舗は日夜行なう通常のライブがまともに開催できない事態に陥り、会社全体の経営維持は困難を極めた。

このコロナ禍のさなか、日本でも多くの企業が激しいリストラを断行せざるを得ない時期でもあった。ここ数年はライブハウスの追い風もあり、ロフトグループが直接経営するライブハウスは地方も含めて10軒以上にもなったが、2019年の暮れ頃から始まったコロナ禍はライブハウスにとってまさに脅威、大打撃だった。ライブはほとんどやれずじまいで収益が絶たれたが、人材を人財と捉えるロフトは社員（正社員五十数名、アルバイト100名）の首を一切切らないと宣言し、2億円もの借金を政府系金融機関から借りることにしたのだ。政府のコロナ対策のおかげで、この借金は無担保、無保

証人、金利1%という好条件だったのだが、「ライブハウスは三密（密閉・密集・密接）の最前線」と揶揄されながらも、私たちはこの未曾有の苦境を耐え忍んでいた。

そんな折、タブロイド判夕刊紙『日刊ゲンダイ』の編集部から私に連絡が来た。「『ロフト創業者が見たライブハウス50年』という連載が企画会議で通り、是非とも掲載させていただきたく、ロフトの創業者である平野さんに連載記事を書いてほしい」という依頼だった。編集担当は、かつて下北沢ロフトでアルバイトをしたこともあるという男だ。

まもなくロフト創立から半世紀が経とうとしていた。ライブハウスなどまだ東京に一軒もなく、『シティロード』や『ぴあ』といった情報誌もない時代、私はほんの手作りの店舗をこしらえて出発した。それから50年もの歳月が経過したのだ。ロフト創立前夜の60年代後半、日本のポピュラー音楽は外国のロックの高揚を目の当たりにして、音楽家たちの多くは見よう見まねで外国のレコードをコピーするばかりだった。ロック・ミュージックの微風すら起こせなかった時代を経て、日本のロック・シーンは70年代に入る

とわずか数年で怒濤の如く成長し、生まれたばかりの日本のロックは見る見るうちに歌謡曲全盛の芸能界を席卷、やがて日本の音楽業界全体を席卷する存在として大いなる発展を遂げていった。

この日本のロック・シーンを牽引し、その先頭を往く気鋭の音楽家たちと常に併走してきたのがライブハウス「ロフト」の存在だと思う。今や全国に2000軒以上のライブハウスが存在し、街中にあるライブハウスという言葉は常用語となり、日本のカルチャーの中にもしつかりと定着した、もはやなくてはならないコミュニケーション空間、情報発信基地となった。

そんなライブハウスがここ日本で浸透していく萌芽の年、それが1976年だった。

1976年10月の新宿ロフトのオープンは、日本のロックが真の意味で市民権を勝ち取る前哨戦だったわけだ。80年代に入ると空前のバンド・ブームが訪れ、ホコ天にイカ天と、多くの若者から絶大な支持を得た日本のロックは全盛を極めるようになった。そ

の発火点として新宿ロフトが果たした功績は大きい。そして、その新宿ロフトがオープンに至る過程もまた重要であり、そこからさらに遡り、前時代的だった60年代後半の日本の音楽業界の在り方や、それに異を唱えるべく1971年3月に烏山ロフトが生まれた時代背景を再検証する必要がある。

本書は、『日刊ゲンダイ』にて連載が続いた『ロフト創業者が見たライブハウス50年』の記事をベースに、ライブハウスという新たなカルチャーが胎動した時代の息吹や熱気を伝えたいという趣旨のもと企画された。過去にロフトに関する書籍としては『定本ライブハウス「ロフト」青春記』（世界書院、2020年刊）があるが、そこでは深掘りされていない。1976年の新宿ロフトのエピソードを大きな軸として、日本のフォーク／ロックの高揚と停滞、長く曲がりくねった歴史を体感していただきたい。

本書は『日刊ゲンダイ』にて2020年6月から2021年11月まで掲載した連載記事「『ロフト』創業者が見たライブハウス50年」を大幅に加筆したものである。また、「第2章 1976年の新宿ロフト 平野悠×牧村憲一 対談」は本書用に録り下ろした。

目次

プロローグ 5

第1章 ロフト創業 〔新宿ロフトオープンまで（1971年～1976年）〕 14

ジャズスナック・ロフト誕生（1971年） 19

ライブハウスへの目覚め 〔西荻窪ロフト（1973年）〕 23

本格的なロックのライブハウス、荻窪ロフトがオープン（1974年） 32

独自の文化圏でオープンした下北沢ロフト（1975年） 40

それまでのロフトの集大成だった新宿ロフト（1976年） 47

## 80年代の憂鬱

市民権を得た日本のロックは大躍進を遂げ、マイナーからメジャーへ

ロック情報誌『ルーフトップ』の創刊（と休刊） 130

ライブハウス・ロフト・シリーズの誕生 134

伝説の『ロフト・セッションズ Vol.1』 138

ドキュメント・アルバム『衝撃のUFO』の衝撃 142

トムス・キャビンとの共同シリーズ企画『アメリカを聴く』 146

メジャー化していくシティ・ポップ系ロック 149

『DRIVE TO 80's』の衝撃 くロフトがパンク路線に踏み切ったく 151

地引雄一が語る、日本のロック・シーンに与えたパンクの衝撃 159

パンクの正統派、〈東京ロッカーズ〉の時代 163

パンク・ムーブメントが起こしたインディーズ文化の誕生 171

ハードコアパンクの出現とロフトからの追放劇 174

店長とスタッフからの呼び出し 177

ポスト・パンクの時代 ～ニュー・ウェイブ、テクノ・ポップ、ヘヴィメタルまで 181

高崎の不良バンド、BOWWYが私の最後の音楽仕事になった 185

ロフト解散宣言 ～世界100カ国制覇の旅への挑戦 192



第1章 ロフト創業  
〜新宿ロフトオープンまで（1971年〜1976年）



1976年10月。ロフトは1973年から続けてきた「ライブハウス」の集大成、決定版として新宿に進出することになった。ロフトが経営する東京のライブハウスとしては、西荻窪、荻窪、下北沢、そして新宿と、実に4軒にもなった。

この時代、それまで東京のロックやジャズ文化の情報を熱心に発信し続けてきた中央線三寺文化圏（吉祥寺、高円寺、国分寺）は、新宿や渋谷といった巨大ターミナル周辺に現れたロックのライブ拠点の巨大な力に<sup>か</sup>撓め取られていくことになる。大都市・東京のターミナルに、新宿のルイードや開拓地、渋谷の屋根裏やライブ・インは圧倒的なロック・ライブを連日開催し、ロック情報を流し始めたのだ。さらには東京厚生年金会館、渋谷公会堂、渋谷エピキュラス、東京郵便貯金会館などの大型な公のハコでもロックのコンサートが盛んに行なわれていた。

70年代初頭に生まれた日本語のロック・シーンは、まだいわゆる歌謡曲全盛の芸能界からは無視され続けてきたわけだが、少数派ではあったものの、ようやくわれわれの支持する音楽が花開いていく時代でもあった。

1971年3月に鳥山ロフトという小さなジャズ喫茶から出発したロフト。いつしか私は自分の店でライブをやりたいと考え、西荻窪ロフト（1973年6月）を皮切りに、荻窪ロフト（1974年11月）、下北沢ロフト（1975年12月）と、ほぼ1年に1軒のペースで矢継ぎ早にライブスポットをオープンさせた。それは日本語で唄われる日本独自のフォークやロックが急速に若者たちに支持されていくのと呼応する形であり、まだライブハウスという言葉もなく、ライブ自体をやる場所が少なかった時代に「ロフト」が果たした役割は非常に大きかったと言える。

1976年10月には西新宿の小滝橋通りに新宿ロフトがオープン。70年代末期のパンク・シーン、80年代の空前のバンド・ブーム、90年代のメロコアやスカコア・シーンはすべてこの新宿ロフトから始まった。つまり現在まで脈々と続く日本のフォーク／ロックの歴史はそのまま「ロフト」の軌跡と符合するのだ。

それからわれわれはマイナーな存在だったロック文化（ライブハウス）の先頭を走り抜いてきたわけだが、全国から熱く押し寄せてくるロック・ムーブメントを懸命に追いか

ける形になった。ロフトは70年代前半に西荻窪、荻窪、下北沢に50〜100人規模（当時はまだオールスタンディングというシステムはなかった）のライブ空間を次々と開店させた。新宿ロフト以前のロック系ライブハウスは、ロフト3軒のライブ空間を筆頭に、中央線には曼荼羅（吉祥寺）や次郎吉（高円寺）、そのほか小さなライブ空間がたくさんできてこのシーンを担ってきたのだが、その多くは本格的なロックを演奏するにはちよつと物足りなく、不十分だったと考えていた。しかし、集客の点ではまだまだ多くのロツカーは無名な存在であり、ライブハウスに100人以上の集客があるバンドは数少なかった。

そんな中、ロフトは荻窪ロフトに次ぐ下北沢ロフトの圧倒的な成功を踏み台として、300人を収容する大型のライブハウス構築に向けて活動を開始していったのだ。それほど下北沢ロフトは多くのミュージシャンの溜まり場となり、1976年の新宿ロフト誕生は大きな話題となった。この時点からロフトは日本のロックが市民権を獲得していく重要な拠点となり、次世代を担う音楽に携わるまだ名もなき若者たちがこぞってロフトに集うようになる。

まずは新宿ロフトのオープンに至るまで、烏山ロフトから下北沢ロフトまでの歩みを振り返ってみよう。

## ジャズスナック・ロフト誕生（1971年）

1971年春、私は26歳。当時、私には妻と子どもがいた。さらにはかつての政治の季節の時代、全共闘運動で複数回逮捕されていたので就職もままならなかった。まだ怖いもの知らずの青春の真っ只中、私は特に落ち込むこともなく意気軒昂だったが、これから家族を養うための生活を考えなければならぬ苦境にいたのだ。そこで私は手持ちの数十枚のレコードをもとに、京王線の千歳烏山にジャズスナックを開店さ

# 山小屋風スナック

# 烏山に誕生!!

TEL 308-8691

COFFEE & WINE **LOFT** IS YOUR ROOM

ちかごろ若者向のスナックが少なくなると悩んでいる若者に絶対の店、スナック・ロフト誕生!! 大東京にもめずらしい山小屋風スナック新しい君の個性を創り出す部屋……

●ロフトとは、屋根裏という意味でアメリカのヒッピーの愛用する言葉です。

<b>MEN</b>	ロフト特選コーヒー	120	ガレマウンテン	180	オールド	300
	コーヒーブレンド	120	紅茶	120	サンドウィッチ	250
	ブラジル	160	コーラ	130	焼そば	200
	マンデリン	160	ビール	220	カツライス	300
	コロンビア	160	日本酒(大)	250	カレーライス	250
	カリマンタン	160	ウイスキー 白	100	キーボックス	3,000
	モカ	180	ウイスキー 角	200	角	3,000
					オールド	4,000



せた。7坪の木造モルタル造りで、開店当時はログハウス風のジャズ喫茶だった。自分としては本格的なジャズ喫茶を作りたかったのだが、それはまことに危なっかしい船出であった。吉祥寺や新宿の老舗ジャズ喫茶は数万枚のレコードストック、巨大なスピーカー・システムを所有し、専属の皿回しまでいたのだ。そんなノウハウもなく、わずかな数十枚のレコードしか持っていない私がジャズ喫茶を名乗るなんて、あまりに無茶な話だった。

だがそれが、その後50年も続くロフトの始まりだったのである。ロフトとは屋根裏部屋のこと、当時、ニューヨークの芸術家の卵たちがソーホー地区を中心に屋根裏部屋をシェアして安く借りていた。その共同の作業場を「ロフト」と呼んでいたことから命名したのだ。

当時はいわゆるスナック・ブームだったこともあり、できたばかりの烏山ロフトにもそこそこ若いお客さんがやってきて、彼らの溜まり場にもなっていた。そんな若いお客さんたちが「この店は私が持っているレコードよりストックが少ない。かわいそうだ

から私のレコードを聴かせてあげよう」と同情してくれたのかどうかは知らないが、私はお客さんが持つてくる得体の知れないレコードを貪るように聴くようになった。そして、「ロックつてすごいな。日本のフォークソングも捨てたもんじゃないな」と痛烈に思ったものだ。一番初めにぶつ飛んだのが、ピンク・フロイドの名盤『原子心母』やレッド・ツェッペリンの「ブラック・ドッグ」といったナンバー。圧巻だったのは山下洋輔トリオによるフリージャズの名盤『DANCING古事記』であった。私はその頃、ジャズと言えばジョン・コルトレーンばかり聴いていて、あまり好きではなかったフリージャズで感動したのは初めての経験だったのだ。さらには、高石ともや、岡林信康、三上寛、高田渡、友部正人、浅川マキ、大塚まさじといったレコードに傾倒していった。若者たちはこれでもか、これでもかと自分の手持ちのレコードを持って店にやってきたのだ。結果的に私は若いお客さんたちからロックやフォークを教わることになった。「このレコードいいね。ちょっと貸しておくれ」と言っ、店にはお客さん用のレコード棚ができていったのだ。

そんなふうに、烏山ロフトは看板として掲げていたジャズスナックの店から、ジャズ、

ロック、フォークといった雑多な音楽を楽しめる空間へと店のコンセプトを変えた。

鳥山ロフトの常連メンバーは多士濟々。店の近所に音大や芝居の稽古場があり、東京藝大大学院に通っていた坂本龍一さんは、女子音大生のレポートを1杯の水割りと交換にスラスラと書き上げて人気があつた。『平凡パンチ』などで署名原稿を書いていた生江有二さんのレポは圧巻だつた。彼が落書き帳に書き記したレポを読みに来るお客さんもたくさんいた。〈最後の全共闘〉と言われた明大の二木啓孝さんの姿も、毎夜のように見られた。

初めての店だったので、私も躍起だつた。昼の12時から翌日の始発時間までの営業を連日貫いたのは、若いからできたことだつたと思う。今にも潰れそうだつた7坪の鳥山ロフトは若いお客さんたちに支えられ、半年後にはそこその黒字となつた。オープン3カ月でなんとか滞りなく家賃が払えて従業員も雇えるようになった。しかし、わずか7坪の店、15人もの客で店が一杯になつてしまふ、1日2万円の売り上げだけの店では自分の将来に展望は開けなかつた。そこで親から借金をして、頑張つて2軒目の店を探すことになつた（なお、その後、鳥山ロフトは1975年に閉店する）。

## ライブハウスへの目覚め 〜西荻窪ロフト（1973年）

ロフト2軒目の店は、1973年6月にオープンしたフォーク系を中心としたライブハウス、西荻窪ロフトだった。中央線・西荻窪の北口商店街の一角にあり、広さは15坪。まだライブハウスという言葉すらなかった時代、そのオープンはジャズ系以外の日本のフォーク／ロックのミュージシャンにとっては画期的な出来事だったようだ。自由に歌え、演奏できる空間の誕生に、新進気鋭のミュージシャンの誰もが喜んでくれたのだ。



西荻窪ロフトの外観

この西荻窪ロフトは、浅川マキ、頭脳警察、山下洋輔、友部正人、ディランII、坂本龍一、南正人など、各ジャンルのミュージシャンに演奏の場を提供。以降、浜田省吾、ALFIE（アルフィー）、山崎ハコ、森田童子、南佳孝などのニューミュージック・シーンを代表する人々の常演する場所となっていた。1980年に閉店。

私がライブハウスをオープンすることになった経緯はこうだ。烏山ロフトで毎夜、私は熱っぽく、2軒目の店舗のイメージをお客さんたちに話っていた。ある夜、常連の音楽ライターであるSさんがこんな話をしたのだ。

「平野さんは前からはっぴいえんどや山下洋輔トリオを生で見たいと言っていたじゃない

## 西荻 LOFT

### コンサートスケジュール

或アワサリ感に本格的な音響設備 LOFTが音楽と音楽を  
 世界には面影の意地があらわ、西荻窪 地味に格闘家  
 有名な人も無名な人も自由に演奏している場所他に見当  
 りはずはない。  
 やっぱ!! ツーは面影の店を大事にするはずだ!!

11月21	Keeloo + 橋本 俊一
24	元イランII さよなら!!
27	井上 憲 一
28	三上 寛 + サスケ
29	ロフト 新人コンサート
12月5	タッチャ、エド
6	いとうたかお・鳥 学
12	林 宏・きんぎん
13	シバ + 1
14	久保 真 琴
19	林 学 セントアルスハウス
20	ロフト 新人コンサート
21	ロフト 年末の争
26	吉田 勘一 + 1
27	西荻 LOFT まつり① 久保田真琴・井上憲一・橋本俊一 Keeloo
28	西荻 LOFT まつり②

西荻窪駅 395-5473

企画制作 ロフト企画

いか。今は東京はもちろん、日本全国にロックやフォークを聴かせるライブ空間がほとんどない。これはとても悲劇的なことで、海外のロック・シーンに比べると大きな損失だ。これからは間違いなく日本にもロックの時代がやってくる。今からそんなライブ空間を作れば、平野さんは日本のロックやフォークのパイオニアになれるよ」

Sさんは、ロフトの2軒目の店はライブハウスにするべきだと主張する。

“パイオニア”という言葉の響きに私は虜になった。これは私にとって、なんとも考えてもみなかった提案でもあった。次第に私はこの真新しいアイデアにのめり込み、未知の世界を空想した。

私は当初、村瀬春樹さんらが開いた吉祥寺のカフェ、BLUES HALL／武蔵野火薬庫を名乗るぐわらん堂のような、若者が集まって支持される空間をイメージしていた。しかし最終的に私は、あくまでライブスポット、あるいはライブハウスと呼ばれる、音楽家たちが自由に演奏できる空間を創作することを決断した。店作りには自信は全くなかったが、できればぐわらん堂と同じ吉祥寺に出店したかった。だが、吉祥寺は家賃が高すぎ

て手が出ない。それで隣駅の西荻窪の駅近くに20坪の物件を見つけ、そこで店を開くことにした。その物件を一番喜んでくれたのは、山下洋輔の所属事務所であるテイクワンを運営していた柏原卓だった。マイクスタンドの立て方もわからない私に、彼らテイクワンのスタッフ（のちに音楽ライター／プロデューサーとして活躍する長門芳郎<sup>ながとよしろう</sup>、はっぴいえんなどを支援していた風都市にいた前田祥丈らが在籍）は快く店舗運営の協力をしてくれた。ブッキングのノウハウやPA機材の訓練を彼らに受け、なんとかオープンに漕ぎ着けた。オープンニング・セレモニーの第1弾は、もちろん山下洋輔トリオにやってもらった。山下洋輔トリオに演奏してもらうために私はわざわざ中古のアップライトピアノを買ったのだが、フリージャズならではの山下さんの熱のこもった奏法によって、1日でペダルが2本とも壊れてしまった。それでもやはり、生の演奏の迫力には感激した。ジャズ喫茶では決して味わえないライブハウスの魅力をオープン早々に知った。

それと同時に、ライブだけでは決して店を維持できないこともすぐにわかった。当時、ミュージシャンへ支払うギャラは、固定で2万円が必要だった。だが、ほんの一部のバ

ンドを除き、ライブの客はほとんどが数人という有様。もちろん『ぴあ』も『シテイロード』といった都心の情報誌もまだない時代。私たちが支持する音楽はまだマイナーな存在であった。

私は開店3カ月目で固定ギャラ制度をやめて、入った客人数分のチャージを全額ミュージシャンに返すシステムに変更した。それは、チャージとは演者のものであり、店はドリンクと食事だけで売り上げを稼ぐべきという私なりの考えがあったからだ。ライブを続けていくにはそれしか方法がなく、しっかり稼がなければ店が潰れてしまうと危機感を抱いた。だが、そんな切迫感があったからこそ真剣に店舗を維持することと向き合えたのだろう。今ではこのチャージバック・システムが全国のライブハウスにとって基本ツールとなっている。

しかしその後、ロックが人気を集めるようになると、バンドやマネジメント側はより良い音や照明の効果を求めてくるようになった。そうした演出の技術や良い機材を持っていないと、お客さんの入るバンドは出てくれない。結局、ライブハウス側はその機材費捻出のためにチャージにまで手をつけるようになった。おそらく、現在のほとんどの

ライブハウスはこうした形態になっていると思う。

毎日のライブ開催は集客も見込めず、到底無理なので、ライブは週末の金、土、日曜、祝日の夜に絞った。店は昼間の12時から夕方6時までロック喫茶をやる（もちろんジャズやフォークのレコードも揃えた。吉祥寺にあった「赤毛とソバカス」に近いロック喫茶だ）。ライブのある日は夕刻6時でリハーサルに入り、夜の10時頃までがライブの時間だった。それから店を勢いよく片付け、ロック居酒屋として中央線の始発までの商売を続けた。

こうしたシステムは新宿ロフトまで続くわけだが、それはライブだけではとても店を維持することができないと過去の店舗経営から学んでいたからだ。現在、ライブハウスを経営するオーナーの多くは、そんな事情は知らないに違いない。

さらに困ったのは、近隣への騒音問題だった。地上1階、スーパーマーケットの一角にあった西荻窪ロフトは、ロックの生演奏ともなるととても音を外へ飛び出し、近隣からものすごい苦情と抗議があった。ライブ中に隣の魚屋の親父が「うるさい！ 音

を止めろ！」と包丁を持って飛び込んできたこともあった（山下洋輔さんのライブの日だった）。まったく、無知というのは恐ろしいことで、私としては全く予期していなかった問題が起きたのだった。そうした経緯もあり、日本に久しぶりに出現した西荻窪ロフトという貴重なライブ空間は、オープンから数カ月後にはもう弾き語りのライブしかできないことになってしまった。

初めてのライブハウス経営はそんな苦難の連続で、お客さんも少なかったが、武蔵野フォーク村の面々が全面的に支援してくれた。井上憲一、南正人、高田渡、友部正人、シバ、関西フォークの一派などが西荻窪ロフトの常連演奏者だった。ムーンライダーズや裸のラリーズといったロック・バンドはアンプを通さず、マイクなしで歌うことになった。

## 1974年10月

NIGHT TIME チャージ(¥200)+オーダー

- 31 (木) シンセサイザー・シヨ  
30 (水) ヘロフト新人コンサート  
25 (金) KIBOO  
24 (木) 友部正人  
18 (金) シバ+1  
17 (木) 友川かずき  
11 (金) 井上憲一  
10 (木) 久保田麻琴  
3 (木) 南正人

## 1975年11月

NIGHT TIME チャージ(¥200~400)+オーダー

- 1 (土) 野沢享司  
8 (土) 長谷川きよし  
9 (日) 下村明彦  
12 (水) 友部正人  
13 (木) へ詩の朗読会  
14 (金) へ音楽、革命、暴力を語る  
平岡正明  
15 (土) へおぼけと円盤を語る  
平野威馬雄  
16 (日) 生田敬太郎／よしこ  
22 (土) 佐渡山豊  
23 (日) 佐藤公彦  
27 (木) 南正人  
29 (土) 宿屋の飯盛／野沢享司  
30 (日) へ新人コンサート

## 1976年4月

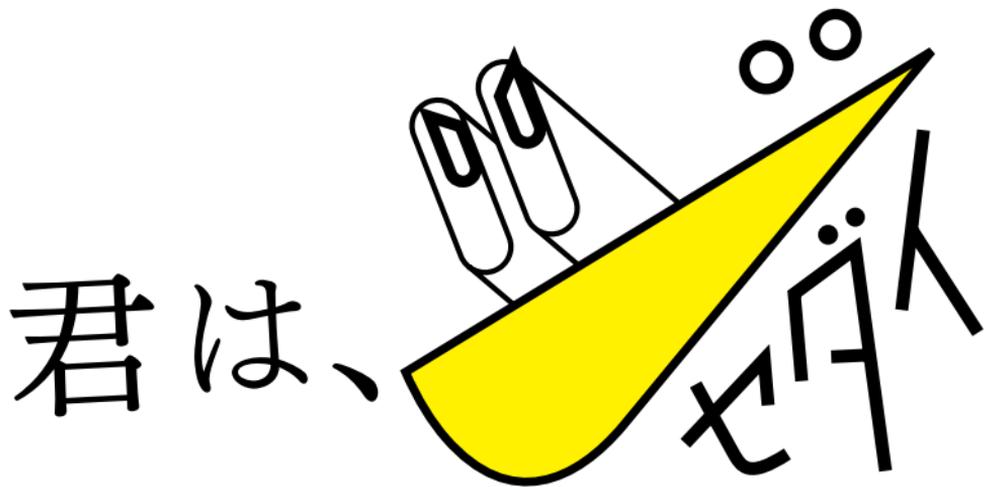
NIGHT TIME チャージ(¥200~500)+オーダー

- 1 (木) 飛べないアヒル+1  
 8 (木) 中川五郎  
 9 (金) シバ  
 15 (木) 生田敬太郎 / よしこ  
 16 (金) 森田童子+1  
 22 (木) 友部正人  
 23 (金) 24 (土) <詩と歌>  
 23 (金) <アメリカをうたう> 諏訪優  
 24 (土) <津軽をうたう> 諏訪優+三上寛  
 28 (水) <新人コンサート>  
 29 (木) KEEBOW  
 30 (金) 休みの国 / 佐藤やすお

## 1976年6月

NIGHT TIME チャージ(¥200~500)+オーダー

- 4 (金) 渡辺勝  
 5 (土) 中山ラビ  
 11 (金) 長谷川きよし  
 12 (土) 山下成司 / 朝野由彦  
 13 (日) 佐渡山豊 / きくち寛  
 18 (金) KEEBOW  
 19 (土) よしこ / あべあきら  
 25 (金) 26 (土) 森田童子  
 25 (金) <ゲスト> 浜田省吾  
 26 (土) 中塚正人  
 27 (日) ソンコ・マージュ



# 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

## メインコンテンツ **ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

## **ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

## **星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!